



**Data**

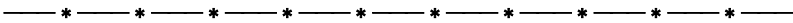
監督・脚本：キム・ビョンウ  
 出演：ハ・ジョンウ／イ・ギョンヨ  
 ン／チョン・ヘジン／イ・デ  
 ビッド／キム・ソジン／キ  
 ム・ホンパ

## 👁️👁️ みどころ

TVは視聴率が命！亡き「たかじん」を見ても、「さんま」を見ても、「たけし」を見てもそう思うが、TVのニュースキャスターだってそれは同じ。すると、爆弾テロは警察に通報するより、TVで生中継した方がいい・・・？

声だけの犯人とキャスターとの息詰まる攻防戦のバックには、報道局長やテロ対策班が登場！犯人の要求は何と大統領の生出演による謝罪だが、さて当局の対応はいかに？

98分間の「テロ、ライブ」のスピード感と迫力はすごい。韓国映画のパワーに圧倒されること、間違いなし！



## ■□■スタジオという新たな「密室モノ」が誕生！■□■

「潜水艦モノ」に、はずれなし！「密室モノ」に、はずれなし！それが私の1つの信念だ。篠原哲雄監督の『真夏のオリオン』（09年）や樋口真嗣監督の『ローレライ』（05年）、ドイツのウォルフガング・ペーターゼン監督の『U・ボート（ディレクターズ・カット版）』（97年）やトニー・ジグリオ監督の『Uボート 最後の決断』（03年）、さらにロシアのキャスリン・ビグロー監督の『K-19』（02年）などの「潜水艦モノ」、そして、韓国のポン・ジュノ監督の『スノーピアサー』（13年）や中国のフォン・シャオガン監督の『イノセントワールドー天下無賊ー』（04年）などの「列車モノ」等の「密室モノ」には名作が多い。そして、ここにスタジオという新たな密室モノの名作が誕生した。

韓国語翻訳家ペクヒョンハ氏のブログでは、「本作は2013年に韓国で、『雪国列車／スノーピアサー』と同時に公開されたが、こちらはおそらく日本公開はなさそうなので、

思っきりネタバレします。」と書いている。私は2014年9月5日にテアトル梅田で本作を鑑賞しパンフレットを購入したが、そこでの「ストーリー」紹介は極めて簡単だから、本作の評論を書くについては、このネタバレ情報は貴重だ。

細かいストーリーの展開以上に、まず私が感心したのは、本作で商業映画デビューを果たした1980年生まれの若手監督キム・ビョンウが、本作の舞台をスタジオという「密室」に設定したこと。潜水艦モノや列車モノという「密室モノ」に名作が多い理由の1つは、密室内であるからこそそこで展開される人間ドラマがより濃密になることだが、本作は舞台をスタジオという密室に設定したうえ、主人公もユン・ヨンファ（ハ・ジョンウ）一人に設定し、テロリストは声だけの存在に抑えている。そのため、98分という凝縮された時間内でスタジオという密室にいるヨンファのみを通じて、何ともスリリングな人間ドラマの面白さが浮かび上がってくるわけだ。本作では、まずスタジオという密室性に注目したい。

## ■このイケメン俳優の演技力に納得！■

韓流ドラマにハマっているおばちゃんたちと違って、韓国人のイケメン俳優に特段の興味の無い私は、本作で一人主人公ヨンファを演じるハ・ジョンウを特段意識していたわけではない。しかし、『依頼人』（11年）で妻殺しの被告人とされた男の弁護士カン・ソンヒを演じ（『シネマルーム29』185頁参照）、『ベルリンファイル』（13年）で北朝鮮の秘密諜報員ピョ・ジョンソンを演じた俳優（『シネマルーム31』187頁参照）と聞けば、そのイメージを思い出すことができる。さらに、キム・ギドク監督の『ブレス（息／BREATH）』（07年）で主人公と恋仲になる主婦ヨンの夫を（『シネマルーム19』61頁参照）、『絶対の愛』（06年）で主人公の整形美女と恋仲になるジウを（『シネマルーム13』86頁参照）、さらに『チェイサー』（08年）で連続殺人鬼のヨンミンを（『シネマルーム22』242頁参照）それぞれ演じた俳優と聞けば、これだけ芸達者なのもなるほど、とうなづける。

本作で、キム・ビョンウ監督は2013年青龍映画賞新人監督賞、2013年釜山映画評論家協会賞新人監督賞、2014年百想芸術大賞＜映画部門＞監督賞を受賞するとともに、ハ・ジョンウも2013年釜山映画評論家協会賞男優賞を受賞したそうだが、本作の演技力をみれば、それも当然だと納得。

## ■TVキャスター比較 ヨンファVS古舘伊知郎■

「ニュース・ステーション」にみる古舘伊知郎キャスターはいつも正義ヅラをし、クレイゴトばかりをタレている一面的な顔だけしか見せないが、本作にみるキャスター、ヨンファは、それとは全然違う人間性をみせてくれる。ヨンファが今担当しているのは、午前9時31分“ユン・ヨンファのデイリー・トピック”の生放送だが、かつてTV局の有名キャスターの地位にあった彼にとっては、今のこの仕事や立場は大いに不満らしい。そんなことを公言すれば、ラジオの仕事とテレビの仕事の差別化につながってしまうが、現実

には、そのランク＝差別は明確にあるようだ。テレビやラジオの世界のそのような内幕は一般人にはあまり知られていないから、テレビ局の報道局長として君臨するチャ報道局長（イ・ギョンヨン）と、ヨンファとの確執、密約、裏切り、等々の姿をじっくり見ながら、その実態にも迫りたい。

ヨンファはある「不祥事」でテレビキャスターの職を失い、ラジオ局へ左遷されたらしい。本作冒頭からはそんな雰囲気は全然読み取れないが、番組放送中にあるハプニングと遭遇したヨンファは、これを機会にTVキャスターという表舞台に再び咲くためのアイデアを思いつき、即座に実行。本作導入部に見る、そんな男ヨンファの人物像をしっかり把握したい。しかし、これほどの能力のあるヨンファですら、テレビ界で失敗をしでかしたのに、なぜ古舘キャスターは左遷されず、いつまでもニュース・ステーションのキャスターに居座り続けることができているの・・・？



DVD2015年2月4日(水)リリース 発売元：ミッドシップ  
(c)2013 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved.

## ■□橋が爆破される中、ヨンファの決断は？■□

今どき、どの世界でも、大阪弁で言う「文句言い」、現代語では「クレイマー」がやたら多い。弁護士の一人として公の場所でやっている法律相談に行っても、きちんとした相談なのかそれとも自分の言い分を聞いてもらいたいだけの「相談」なのか、わからないものが多い。そのため、私は20年くらい前から弁護士の法律相談に行くのを止めているが、ヨンファが担当しているラジオ番組にも、リスナーからは時々「俺の苦情を“聞け”」という「クレイマー」的な電話がかかってくるらしい。

大手ゼネコンによる建設現場にはどの国でもさまざまな「悲哀」があるのは当然だが、かつて建築作業員だったと名乗る男パク・ノギュは、自己紹介(?)の後、いきなり「橋に爆弾を仕掛けた。これから爆破する」と予告したが、そこはTVで長年花形キャスター

を務めてきたヨンファのこと。軽く受け流して電話を切り、次の電話を取ったが、その時、何と予告通り麻浦（マポ）大橋が爆発するのを目の当たりにしたから、ヨンファやスタッフはビックリ。

そこまでは映画の導入部としてなるほどと思えるレベルだが、それ以降スピーディに展開していく「切り口」はメチャ面白い。ヨンファがすぐに警察に連絡しようとしたのは、キャスターとしてもしくは一市民として当然だが、なぜかヨンファはそれを中止。直後にヨンファが携帯で連絡をとったのは、チャ報道局長だった。つまり、この緊急事態の中でヨンファの頭の中にとっさにひらめいたのは、これを独占中継すること。そこで視聴率をとれば、ラジオのパーソナリティーというクソみたいな仕事（？）から、再び華やかなTVキャスターの地位に復帰できる。突発事態の中でそんな緊急の決定を下すことができるのは、チャ局長しかいない。トイレの中に誰もいないことを確認しながら、注意深くチャ局長とそんな密約を交わしつつ、ヨンファは髪セット、ひげ剃り等々、万事抜かりなしだ。こんなスピーディかつ興味深い展開には、誰もが引き込まれていくはずだ。

## ■□■よく練られた脚本とスピーディな展開に脱帽！■□■

本作は基本的にスクリーン上に不出ずっぱりのヨンファと声だけ出演のテロ犯パクによる「2人の対決」だが、電話を通じたその真剣勝負はメチャ面白い。ラジオのスタジオがあんなに簡単にテレビのスタジオにサマ変わりできるのかどうかは知らないが、全く予想のつかない事態が次々と起きる中、それに的確に対応していかなければならないヨンファは大変だ。

最初のパクの要求はカネ。「1983年の大橋建設に携わり、2年前の世界首脳会議に合わせた補修工事に駆り出され、過酷な条件下で働かされていた3人の労働者が、橋から漢江に転落してしまった。その時はまだ生存していたにもかかわらず、警察や救助隊は会議の準備に追われ助けに来ることはなかった。3人の労働者は、国と政府に見殺しにされたのだ。そして、未だ遺族への補償や謝罪の言葉は一切ない」と訴え、遺族への補償として要求した金額は21億7924万5000ウォン。もちろん、ヨンファにそれをOKする権限はなかったが、そこは太っ腹（？）なチャ報道局長がOKしたから面白い。これはもちろん、チャ報道局長にしてみれば、それだけ高い金を払っても、高い視聴率を取れば「テロ、ライブ」の価値があると判断したためだが、さてその適否は？ところが、入金を確認したパクの次なる要求は、何と大統領自身による直接の謝罪。そんなことを言われても、ヨンファがそれをOKできるはずはない。しかも、制限時間が10分だと言われたから、さてヨンファは？

本来ヨンファとパクの電話を通じた対決の主導権はヨンファが持っているはずだが、その力関係が逆転したのは、ヨンファの耳にセットされたイヤフォンに小型爆弾が仕掛けられていると告げられたためだ。よく練られた脚本の中、本作中盤には警察のテロ対策班のパク・ジョンミン主任（チョン・ヘジン）と検察庁長のジュ長官（キム・ホンバ）が登場し、報道局長のチャを含めた3人がヨンファに対して次々いろいろな「指示」をしてくる

からヨンファは息継ぐ暇のない対応を迫られる。そして、テレビに出演したジュ長官は、予想以上にパクに対して強硬な主張をくり返し、かつテロ犯を刺激する発言をくり返したから、遂にジュ長官の耳にもセットされていた小型爆弾が爆発！その衝撃度の強さはNHK夜9時からの「news Watch 9」や朝日放送夜10時からの「報道ステーション」を観ている時に、その画面上で政府要人が爆破されて死んでしまう事態を想像すればわかるはずだ。本作中盤に展開していく、よく練られた脚本とスピーディな展開に脱帽！

## ■□■ホントに悪い奴は誰だ？国家権力とは？■□■

本作は大統領がスタジオに登場してくるのか否か？そして、パクの要求どおりに謝罪するのか否か？が最大のポイントになる。しかし、ジュ長官が堂々と公言するように、政府の方針は「テロ犯とは絶対に交渉しない」というものだから、いくらヨンファがその間を取り持とうとしても（？）事態を開解することが難しいのは当然。しかも、ヨンファはテレビの画面上に出て喋らなければならないが、その間ジュ長官やジョンミン主任は官邸とどんな連絡を？さらに、番組の進行について絶対的な権限を持つチャ報道局長は、ウラでどんな画策を？このようにヨンファがテロ犯パクと対峙する姿をメインとし、それぞれの立場でのギリギリの攻防戦が続いていくから、終盤からクライマックスにかけても手に汗を握り続けることになる。

時間に追われているのは、10分以内にスタジオに登場することを要求されている大統領だけではない。爆破され孤立した橋の上には数十人の「人質」が取り残されているし、その中にはヨンファの元妻で、今は現場の状況を生でアナウンスしている報道局記者イ・ジス（キム・ソジン）の姿も。テロ犯の要求に屈せず、国家の威信を守るのが優先？それとも大勢の人質の命を守るのが優先？そういう究極の問いの中でこそ、ホントに悪い奴は誰だ？国家権力とは？という本質が明らかになるものだ。

ヨンファも花形のTVキャスター時代は、政府に有利な報道をする対価として、大統領秘書官から多額の賄賂をもらっていたらしい。これは日本では考えられない韓国特有の「文化」だが、ヨンファですらそうだとすると、韓国にはそれ以上に悪い奴がゴマンといっているのでは……。中国では今、習近平体制の下で「トラもハエも全て叩く」というキャッチフレーズで共産党の大物幹部や政府高官の汚職が次々と摘発されているが、さて、本作にみる韓国のマスコミに巣くう汚職の数々とは？その実態（？）には唖然とせざるをえないが、そうかといって橋を爆破し、パクが主張する事件に無関係な多くの人々の命を人質にとるのは、やはりいかななもの……？

## ■□■やっと犯人が登場！その結末はあなた自身の目で！■□■

本作はスピーディな展開でテロ事件の攻防がライブで描かれるが、視点を変えてみれば、本作はヨンファの成長物語ともいえる。今日一日だけでいろいろな体験をしたヨンファは、今日一日だけで大きく成長していくことがよくわかる。ヨンファが終始一貫して声だけの

テロ犯パクのことを一方で嫌いなながらも、他方で自身の再出世のための道具として利用しようとしていたのはまちがいない。そのためには、チャ報道局長やジョンミン主任を、さらには国家権力そのものたる大統領だつてうまく利用するのが自分の能力。そう思って知恵を絞り、最善の対応をしてきたわけだ。しかし、ラストに至ってやっと顔を見せるテロ犯とのご対面を果たすと・・・。

橋は常時多くの人を利用してはいるのに、爆破された時は人通りが少なかったため死傷者が出ていない。それはなぜ？それは、犯人が近くで橋を見ながら、タイミングよく爆破のスイッチを押したためだ。そう確信したヨンファは一方でパクとの会話を続けながら、他方でパクが潜んでいる位置を推定し絞っていったから、その能力も大したものだ。現実にはパクのような鮮やかな手口で次々と起爆装置を起動させていくことはありえないが、それは「映画はつくりものだから」というフレーズでOKとし、テレビ局の隣の巨大ビルが爆破され、テレビ局のビルに倒れ掛かってくる一大スペクタクルを楽しみたい。

そして、待望の犯人パクとの「ご対面」だが、実は犯人は意外にも若い青年だった。そう、彼は既に死亡したパク・ノギュの息子パク・シヌ（イ・デビッド）なのだ。パク・ノギュは生前、ヨンファのニュース番組しか見ないほどヨンファのファンだったらしい。だからこそ、その息子はヨンファの番組で、ヨンファの声で父の名誉を回復してほしいかららしい。ラストのクライマックスシーンでははじめてそんな「人情話」も登場するが、倒壊しかけているビルの中で格闘する2人には、既に狙撃部隊や突入部隊の手が着々と・・・。パク・ノギュの息子が最後まで握っているのは小さな起爆装置だけだが、それは誰の手に？そして、本作いかなる結末を？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2014（平成26）年9月16日記

